

# なか

広報

2007 No.35

- 発行日／平成19年12月11日発行
- 発行／那珂市
- 編集／市長公室企画課広報係  
〒311-0192  
茨城県那珂市福田1819-5
- ホームページURL（携帯可）／  
<http://www.city.naka.lg.jp>
- メールアドレス／  
[kikaku@city.naka.lg.jp](mailto:kikaku@city.naka.lg.jp)

# 12

目次／Contents

|                        |    |
|------------------------|----|
| 平成19年度那珂市表彰式典          | 2  |
| 税源移譲に伴い必要な住民税の申告手続について | 4  |
| 歴史民俗資料館だより 水鳥          | 8  |
| 公民館まつり2007             | 10 |
| 市政だより（ねんりんピック茨城2007）   | 11 |
| // （図書館まつり ほか）         | 12 |
| 環境ミニトピックス ほか           | 13 |
| まちの話題                  | 14 |
| Information            | 16 |
| 市立図書館へ行こう！             | 18 |
| 活き活き人                  | 20 |
| さわやかさん、表紙の裏側 ほか        | 22 |



茨城の魅力を全国にアピール（ねんりんピック茨城2007総合開会式）

## 土偶・人面付土器と伝統工芸

## 水鳥

6

## 筒形土偶



ほぼ完全な形で保存されている縄文時代のこの筒形土偶は、戸多地区立石の小屋の内遺跡から出土したのですが、現在は個人蔵となって県立歴史館に寄託されています。

土偶は女性をかたどったものがほとんどであり、女性の神秘性と誕生への畏敬、加えて豊かな狩猟漁労を祈願したものと思われます。

また、破壊された形で出土することが多いことから、時期が来ると破壊され、代わって新たな土偶が作られていたようで、死と再生の過程を表すものとも思われ、人間に代わって災厄を受けてくれたものから破壊へと進んだとも思われます。

やがてこれが容器化するものもあって、脚部を省略する人面土器へと変化していきますが、この筒形土偶は、そのような縄文後期のものと思われます。

## 人面付土器



弥生時代の再葬墓から出土したこの人面付土器は、神崎地区本米崎の海後遺跡から出土したもので、現在は県立歴史館が所蔵し、茨城県指定文化財ともなっています。

この土器は、一旦埋葬した遺骨を掘り起こして洗骨し、砕いたり焼いたりしその後で一部を壺に納めたもので、死の女神的な性格と結びついていたり、また死者に対する畏敬の念がさらに高まってきたことを示すひとつと思われれます。

県内でも貴重なもので、このほかには筑西市女方遺跡（細深鉢型）と常陸大宮市の小野遺跡（海後とほぼ同形）・泉坂下遺跡（面ではなく頭部形）から出土しているに過ぎません。いずれも土器としてのすばらしさとともに、かたどられた顔に当時の人々の素朴な感情を伺うことができます。

今秋の歴史民俗資料館の展示は「ザ・フェイス―様々な顔に見る文化―」と題したもので、縄文時代から現代に至るまでの形に表れた「フェイスⅡ顔」を通して、その背後に込められた人々の思いに迫ってみようと試みたものでした。展示資料は、当館に所蔵されていたものの他に、市民の皆様から多数のご協力をいただき、多彩な内容となりました。その中から、市内に  
関係する主なものを紹介してみます。

## 小林重水氏と頭人形



当館には伝統工芸品も寄贈されています。頭人形がそのひとつで小林重水氏の作品です。

重水氏は、ひたちなか市枝川が実家でしたが、やがて市内の後台に移りました。昭和の初期、高等小学校を終えてすぐに、当時茨城県が家内工業振興のために埼玉県岩槻市から招いていた人形師に師事し、頭人形作りの道に入りました。そのときに師事した者は7人いましたが、最後まで貫いたのは重水氏1人といわれています。

昔の雛人形は、頭部を作る職人と胴体を作る職人など2人以上の職人による共同作業でしたが、重水氏作の頭部・顔はすばりかつたために県郷土工芸品



に指定され、頭部だけで世に出すことを許されました。

重水氏の頭人形は、「わらべ」のような愛くるしい子どもから「信長」・「本多忠勝」のような勇ましい武将、「水戸黄門・助さん・格さん」一行など一体一体の特徴が見事に表されています。

また、見る角度によってさまざまな表情が生まれます。「わらべ」は、正面から見るとあどけない表情ですが、見下ろすと高貴な品位が、仰ぎ見ると口を少しゆるめて朗らかに笑う表情を見ることが出来ます。そのはつきりした顔の違いは、永年培った匠の技を感じます。

昭和62年に茨城県郷土工芸技術伝承者に指定されましたが、重水氏は平成7年に亡くなっています。

## 面打ち師鈴木良照氏



老人を示すの中でも特に品位の高い「小牛尉」などがあります。これらは、当館所蔵で常設展に展示されていますが、氏の作品は那珂市の友好姉妹都市オークリッジや東木倉出身の政治家根本正ゆかりの地バートン・ロバート・ハル・フレミング博物館にも贈られています。

良照氏は「忍」を座右の銘としていました。それを示すものとして大文字「忍」の下に「百事百誠在此一字」(百事百誠はこの一字に在り)と刻んだ大駒が残されています。

能面には、さまざまな喜怒哀楽の世界が込められていて、人生の機微を感じることが出来る芸作品です。

鈴木良照氏は、山形県出身でひたちなか市外野開拓に入植して農業に従事していましたが、その後会社員となり額田南郷に移住しました。定年退職を期に、無形文化財技術保持者で全国的に名高い面打ち師長澤氏春氏に師事しました。

良照氏は、かつてある雑誌の口絵にあった釈迦の絵に心曳(ひ)かれ、彫刻に興味を持つようになったといわれますが、ある日獅子に似た形の流木を拾い、それに近所の神社に描かれていた天女を彫ったことから創作活動を始めるに至ったとされています。作品は多数に上りますが、可憐な意味を込めた豊麗な若い女の「小面」や平家の公達(きんだち)など貴公子の優雅さをもつ「武将」、



近年は、簡単便利な世の中となつて、物づくりの職人とその技とが軽視されがちな時代ですが、頭人形や能面などに静かに対面して、人生の歩みについて想いにふけてみるのもいかがでしょうか。

皆様、どうぞ歴史民俗資料館へ足を運んでみてください。